

水島鍬也先生 ——生誕百五十周年に想う——

(公財)神戸大学六甲台後援会 特別顧問
(一社)凌霜会相談役・神戸大学名誉教授 新野 幸次郎



皆さんは、六甲台本館の前庭に建てられている記念碑をご覧になったことがあると思う。しかし、あの裏の文字は案外気づかれていませんが、そこには、水島鍬也先生生誕百周年記念と刻されている。その水島先生の生誕百周年のときには、小説「海賊とよばれた男」で最近特に有名になられた出光佐三さん、内閣副総理大臣を務められた石井光次郎さんをはじめ、水島鍬也先生に直接教えを受けた著名な方々が、先生のご生誕百周年記念委員会を設置され、こうした記念碑だけでなく、水島先生を偲ぶ著書「愛庵先生の横顔」も出版された。遺影を前にした偲ぶ会もおもちになった。また、凌霜会も先生の出身地中津市の水島公園の運営費の寄付もしている。早いものであれからもう五十年経ち、今や水島先生の聲がに接した人は一人もおられない。今更、百五十周年記念でもないのではないかと思われる人もあるかもしれない。

しかし、ご承知のとおり、今日神戸大学の学風とされている真摯・自由・協同は神戸商業大学初代学長の田崎慎治先生が就任演説で述べられた言葉である。しかし、その言葉や発想は、もともと水島先生が学生諸君との対話、討議の中で取りまとめ

られ、学校運営の基本理念にされたものである。更に、水島先生の神戸高等商業学校は、ご承知のように、新制大学としての統合された県下の国公立諸学校・大学の中で最初の高等教育機関であったということもあって、神戸大学創立の起源とされることになった。水島鍬也先生は学校創設以来その校長をつとめられ、ひとり教育者としてだけでなく、高等教育機関の管理運営の面でも多くの業績を積み重ねられてきた。いま高等教育機関を取り囲む環境は、あの当時とは根本的に変化している。しかし、水島先生の教育者および学校経営者としての業績は、今日のわれわれにも示唆するところが多い。

教育者としての水島鍬也先生

教師の一つの理想は、学生一人一人に、何らかの形でこれらの生活の目標を自覚させ、それを各人のミッションとして求道する人材を養成することにあると言ってよい。先生は今と違って一の理想を見事に達成されたといつてよい。先生は今と違って一学年が百八十名ほどだったとはいえ、学生一人一人の名前と顔を校長としてしっかりと覚える努力をされただけでなく、各人と面談、就職先との連絡も含めて、世話を全うされた。その証

拠となる事例は、前記の「愛庵先生の横顔」の中でいくらでも拾うことが出来る。ここでは二人だけ取り上げておこう。出光佐三さんは、愛情によって人が育つことを身をもって教えて頂いたとし、「私個人としては、人間尊重、あるいは黄金の奴隷たることを戒めつつ黄金を尊重するの呼吸を会得したことは、全く先生の尊い教導によるものであって、全従業員とともに先生の大恩に感激しているのである。先生なかりせば、今日の出光はないとさえないいうる。」と述べている。ご両親が水島先生の下で人間の道を学ぶことを切望され、神戸高商に入学した中山正實画伯（水島精神に感動され、のちに講堂と図書館の壁画を描かれたことは、皆さんもよくご存知である）が、「私はやっぱり画家になります。そのためにまず上京したいのですが、母を安心させるために一橋の専攻部に入学したいと思います。そこで先生、どうか私を専攻部へ推薦して下さい」とお願いした時、先生はしばらく沈黙の後、静かに、しかし、重々しい声で「よろしい」と一言いわれた。この一言、裏を返せば「君は行け、君の選んだ道を」という意味であると中山さんは解し、涙がでそうになった。人生意気に感ず。今こそ先生に誓ってこの初志を貫くのだとその時の決心を中山さんは述べておられる。

有名な哲学者で、ノーベル賞を受賞したバートランド・ラッセルは、かつて人間の理想的な性格の基礎をなすものとして、活力、勇氣、感受性、知性をあげた。活力の根本は健康である。万病をかかえたといわれる水島校長は、それもあつてか、体力の養成を基本に、道徳（とくに勤勉・節儉・忍耐等々）の修業と、単に色々な学問を知識として学ぶのではなく、それを応用

する能力の形成を力説し、神戸高商の学風として、先述の真摯・自由・協同の合言葉の体化を図った。そのための工夫の一つが、家族的雰囲気を作りあげるための少人数の研究指導制度と友団制度であつた。研究指導所属学生は毎週集まって報告、討議、批評を経て、その結果「卒業論文」を提出する。また、ユニークだったのは、ドイツの大学のスツデントンシャフトのプリント制度をヒントにした友団組織である。これは校風の美を發揮するための組織であつた興風部のもとに、原籍地または出身学校別の各学生の団体をつくりお互いの交流を密にするという企画であつた。第一期の友団は、二十七にも分かれ、水島校長と教授・助教授陣一体となつた学校運営の結果、吉田松陰の松下村塾をモデルとした村塾気風をつくりあげることになつた。水島校長が急性肺炎に罹られた大正七年には、多くの学生が神社・仏閣に参じて先生のご快癒を祈り御札を拝受して先生のお宅に列をなして持参したといわれるのはその象徴的な事例である。

水島先生がどれだけ教師として崇敬されていたかは、例えば、卒業生何人かが旧葺合区・熊内のご自宅が体裁を欠くというので邸の構相を改め、立派な洋風客室「淡如閣」を増築したり（そこにはご逝去後に「水島鍊也先生終焉之地」という石柱が建てられ今でも2系統のバス道に面して残っている）、出身地豊前中津市のご自宅跡を小公園にし、昭和七年には愛庵会によって、そこに誕生地記念碑が建立されたことにも示されている。

学校経営者としての水島鍊也先生

すべての組織の経営者は、そのあるべき姿についてその構成員をリードできる構想を示すだけでなく、その組織の構成員、

もしくは、利害関係者の積極的な協力を得られる人間的及び経営者の才能をもっていなければならない。高等教育機関としての神戸高等商業学校の場合も例外ではない。その点、帝国大学にもまだ設置されていない全国最初の経済・商業の高等教育機関として設置されていた一橋の高等商業学校に次ぐ第二の高等商業学校としての神戸高等商業学校の理念と運営体制について水島校長は卓越した構想を持っていた。当時大阪市は、工業生産額と商業販売額とで全国一の大きさを誇っていた。しかし、神戸市は貿易港としてはその大阪を凌駕していた。政府は、その神戸に全国各地に開校されていた商業学校とは違って外国貿易を担当し、それを発展させる専門職の養成とそれに関係する経済学・商業・法学などの研究をも担当する高等商業学校の開校を決めた。水島校長はその要請に応えるために、画期的な学生募集の仕方と入学試験のあり方を考えた。当時、中学校は、上級学校への進学とつながるが、商業学校や工業学校などは、それぞれ職業人養成学校として受け止められていた。それもあって、既に東京で開校されていた高等商業学校でも、入学者は中学校卒に限定されていた。ところが、水島先生は、新しい神戸高商には、ひとり中学校卒だけでなく、商業学校卒の人達も受験させるようにし、前者を第一部学生、後者を第二部学生として入学させるようにした。それだけではない。神戸高商を予科一年、本科三年の四年制とし、予科においては第一部の中学卒には一般課目のほか、基礎となる商業学校の若干の科目を、また第二部の学生には旧制中学校的な基礎科目、すなわち、代数、幾何、物理、化学、博物等を徹底的に授業するようにした。

この構想については当初文部省も反対で、東京高商からさえ強い反対があった。東京高商からの反対は、この制度の下で、神戸高商から東京高商の専攻部への進学への反対となって後に更に表面化することになった。ところが、水島校長は譲らず交渉を重ねて文部省を説得するとともに、後に東京高商専攻部への入学も実現する。そう言えば、水島先生の頑固さは、嘗て一橋の校長に文部省がその書記官を任命した際にも示されている。当時この任命に反対した一橋出身の教授たちは、揃って「所労休講」の掲示を出して教室に出ず、また校長室には入らないようにしたといわれる。結局文部省はこの措置を6カ月で取りやめたが、水島先生はこの時の一橋教授連の総帥であったといわれる。

水島先生の構想は、また入学試験を三月にしたことにも示されている。当時、第一高等学校などのいわゆるナンバー高校はすべて七月に入学試験を実施していた。ところが、水島先生は、神戸高商の入学試験を三月にされた。その結果、中学校卒の受験生の中にも、七月の高等学校受験の前に一度神戸高商に受験してみようということにした人が多かった。実際中学卒のなかには、本当は高等学校に行きたかったという人もあるだけでなく、神戸高商に合格できなかったから高等学校に入学した人も出てきた。それに加えて、前述の商業学校卒を入学させるようになり、今日風に言う学力偏差値はきわめて高いことになった。すなわち、全国初めての商業学校卒の高等教育機関入学のチャンスということで、全国の商業学校から一番二番、ないし、それに類する学生が集まることになったからである。「水島鋳

也」という著書を三十年忌を記念して凌霜会からの依頼で出版された平井泰太郎教授は、当時の商業学校卒で学界重鎮となつた丸谷喜市、飯島幡司、高垣寅次郎、花戸龍蔵、坂本弥三郎、赤松要、古林喜楽、新庄博などをはじめ多数の名前を挙げて、水島先生はこの点でもわが国学界に偉大な貢献をされたと述べておられる。

水島先生は優れた学生を集める新しい高商構想を示されただけでなく、教授諸公の指導に絶妙の才能を示された方であった。わが神戸大学の第二代学長になられた古林喜楽先生は、水島校長を「もの言わずして人を化す」人と表現しておられる。すなわち、就任後一度も出講しないで病魔に侵された若い石橋五郎先生のケースがそれである。当時は普通3カ月休むと休職となつて俸給も減少するのに、この先生に水島校長は出講できるようになるまでの1年間そのまま給料を支給された。それだけではない。快復してこれからは身体に気をつけて講義をやらせて頂きますと決意を述べたその先生に、翌日「一ヶ月別府へ出張を命ず」という辞令を渡された。経済地理の専攻だったから、別府出張は全く無関係ではないが、しかし、この「保養命令」には涙が止まらず、命を投げだしてもこの校長のもとで働こうと決意したということである。

似たようなことはロイ・スミス先生に対しても配慮されていた。スミス先生（ご承知のようにその胸像は六甲台に建てられている）は、明治四十二年外国人講師として着任されたが、そのあと、水島校長がスミス先生の婚約者のことを耳に入れられて彼女が神戸にくる旅費まで都合して頂いただけでなく、自分

の提案をいつも熱心にうなづいて下さり、しかも休養と研究のために米国に行く手配までして頂いたことなどが私を神戸高商から離れられないものにしたと述べておられる。

もつともこうした財政上の特別な配慮は、残念ながら現在の大学行政では不可能である。しかし、これは四十歳で校長に就任され、若い教授たちを取りまとめられたリーダーとしての水島先生の配慮の仕方を示す一例にはできるであろう。かつて、シカゴ大学の経営学者R・E・クインは組織を変えようと思つたら、自分を変えることに努めなければならぬと言つた。水島先生は、但馬で青谿書院をつくり、枢密顧問官の北垣国道、初代広島師範学校長などを務めた後に文部大臣となつた久保田譲をはじめ実に多くの人材を養成、但馬聖人といわれその学識と人格の高さをうたわれた池田草庵さんに私淑され、自らの修練に努められたようでもある。

むすびにかえて

水島鍊也先生については、かつて神戸大学を代表する教授にもなられた平井泰太郎先生が、三八二頁に亘る名著を書いておられる。ただ、平井先生が出版されたのは、昭和三十二年のことである。その後神戸大学は兵庫県立医科大学や農科大学を、また神戸商船大学を海事科学部として統合し、十一学部からなる全国でも屈指の学生数を擁する大学になった。また、国立大学の法人化も行われ、大学運営体制は根本的に変化した。国立大学は従前のように、文科省の指示の通り運営するのではなく、独自に研究・教育費を調達し、学長の裁量で予算と人事の一部まで動かせるようになった。おまけに全国の大学・研究機構の

二十二が研究大学と選定され、それを更にABCに三つに分けて助成金支出がなされるようになった。それは原則自然科学中心で、神戸大学以外の二十一大学・研究機構は、すべて自然科学系の研究所を最低一つ以上持つところである。にも拘わらず神戸大学は幸いにして社会科学系研究所を持ち、文理統合の研究ができる大学と認定されてその中に加わることができた。

しかし、その後更に文科省は、国立大学法人の運営費交付金の三〇四割を主として自然科学系の研究成果に応じて配布するというような方針を明らかにしている。こうした局所的で短期的な成果指向的研究費の配布では、真の科学の発展を保證できないのではないかというノーベル賞受賞者の利根川進さんのような批判もある。それはともかくとして、こうなれば国立大学の運営はますます理系中心の効率主義的なそれに基いて進められることになりかねない。科学技術の革新はたしかに経済発展を生み出す大きな要因ではある。しかし、アダム・スミスの「国

富論」やJ・M・ケインズの「一般理論」が示したように、そうした科学・技術の発展を保障する経済社会機構の変革と改善とは、それにもまして大切なことである。一九七八年の鄧小平さんの改革開放は科学技術の発展よりこうした経済体制変革によって中国の飛躍を可能にすることになった。神戸大学のように文理統合の教育・研究体制のとり易い大学は、いまこそ全教職員と学生諸君及び卒業生が一体となって日本国の経済的発展に必要な大学運営の新機軸を作り上げなければならない。かつて神戸高商と東京高商とは、旧帝国大学中心の文部行政に対抗して、わが高等教育の発展に寄与してきた。いまこそ、私たちは、その動きの中で、母校のかつての発展を達成してこられた水島先生の中に想いをはせながら、激変するグローバル化・シヨンの中で、ひとり神戸大学や日本全体の高等教育機関の発展のためだけでなく、日本社会の発展のために新しい工夫をしなければならぬ。

わが国の経営機械化を拓いた巨人

平井泰太郎

神戸大学名誉教授 北 村 新 三

昭和24年に新制神戸大学が発足し、わが国初めての「経営学部」が設置された。平井泰太郎はその最大の功労者であり、また経営学博士の第1号であった。

平井は大正7年に神戸高等商業学校を卒業して東京高等商業学校（現在の一橋大学）専攻部へ進み、商学士の称号を得た。

ちなみに東京帝大と京都帝大に経済学部が設置されたのは大正8年であり、大正時代前半ではこの専攻部が経済・商学分野の最高学府であった。神戸高商に帰った後、大正10年からドイツに留学し、ベルリンやフランクフルトで発展しつつあった Betriebswirtschaftslehre（「経営学」と訳されている）を学び、